

目次	会員通信 .....	339
	雲南地衣類調査行2007(その6). 終章/原田 浩 .....	339

## 会員通信 From Members

### 雲南地衣類調査行 2007 (その6) . 終章

A field trip for lichen study in Yunnan, China, 2007 (part 6) / by HARADA Hiroshi

原田 浩 (千葉県立中央博物館)

#### 雲龍そして天池

10月21日, 目覚めると雲龍の町は小雨だった。街道に面した我々のホテルの向かい側には4階建てのホテルが並んでいたが, そのすぐ後ろに山が迫っていた。反対側の方が土地に余裕があるようで緩斜面の先には比

較的低い山並みが雲に覆われていた。

山上からながめると(本日の調査の帰りに見たのだが), 山の中の小さな盆地に突如ボツンと出現した不思議な町のように見えた。すぐ近くを流れる, 大きく蛇行した川も印象的だった。



図1. 雲龍の町。(左), 泊まった宿から街道の反対側を見ると, 4階建てのホテルが並び, その後ろに山が迫っていた。(右), 山上から雲龍の町を望む。右端の方が町の中心部。



図2. 松の幹に着生するイワタケ属, *Umbilicaria yunnana*. 黒い裸子器をたくさん付けている。左側にはウメノキゴケ *Parmotrema tinctorum* が見える。

雲龍の町外れから1時間ほど山道をたどり、天池と呼ばれる山上湖（標高2580m）に着いた。湖畔には松の木が立ち並んでいるのだが、たくさんの大型地衣が着生している。種数もそれなりにあるが、中でも、まず紹介しておきたいのが *Umbilicaria yunnana* である（図2）。岩上生の地衣の代名詞のようなイワタケ属の一員でありながら、この種は常に樹皮着生するという変わり者なのである。黒い裸子器をたくさん付け、まだら模様となって目立ちやすい。

それにも増して私の興味を引いたのは、同所的に生えていた地衣類である。ウメノキゴケ *Parmotrema tinctorum*、マツゲゴケ *Rimelia clavulifera*、ゴンゲゴケ *Hypotrachyna osseopalba* 等。多くが千葉県など、日本の暖温帯で普通に見られる種なのである。そういった種類の中に *Umbilicaria yunnana* が混じっているというのは、何やら不思議な感じがするものだ。

\* \* \*

天池を去り、雲龍で昼食を済ませた我々は、大理方面への道を引き返した。来るときには真っ暗で周りの様子が判らなかったが、思いのほか山は低い。高速道路へ入り東進し、大理を過ぎ、楚雄まで一気に走った。昆明へはあと100kmちょっと残すこの町での宿泊となった。

#### マツゲゴケ、カラタチゴケ、・・・

翌10月22日は再び高速道路。間もなく彩雲というインターで下り、北に反れた。昆明よりも少し標高の低い田園地帯である。刈り取りの終わった水田が広がっている。そこよりもほんの100mか200mほど高くなった丘陵地を目指した。

その丘陵地は、かなり人手が入っているようで、比較的小径木からなる二次林で覆われていた。道路際を見ても、地衣類はあまり目立たなかった。しかし、せっかく

来たのだからと、停車した場所で試しに林に入ってみた。せいぜい高さ4~5mの松林中で、直径も10センチ前後のものが多い。しかし、大型地衣がよく着生していた。まずはウメノキゴケ科では、マツゲゴケが最も多く、ニセマツゲゴケ *Parmotrema mellissii*、ウメノキゴケ、ナミガタウメノキゴケ *P. austrosinense*、ゴンゲンゴケ、ウスイロマツゲゴケ *P. subpallenscens* もある。ここまでは、千葉県(暖温帯)の地衣類相によく似ている。しかし、これにカラタチゴケ *Ramalina conduplicans* がたくさん混じっているから不思議だ。日本では、カラタチゴケは冷温帯によく出現するが、暖温帯ではまず見られない。このように、ウメノキゴケとカラタチゴケが共存することはめったに無いのだ。

\* \* \*

この松林が、今回の調査旅行における、最後の野外調査となった。昆明に戻ると、標本整理の毎日だった。この間、王さんだけでなく、老王さんなど、王さんのご近所さんとも食事をしたりと、今までの調査旅行とは少し違った趣となった。それもまたよし。

\* \* \*

今回で6回目となる「雲南地衣類調査行2007」も、本稿にて終章とさせていただきます。次の調査は2009年2月頃を予定しているので、新シリーズ「雲南地衣類調査行2009」として投稿したい。

しかし最後にページが余ったので、今回の調査旅行の中から地衣類の写真を追加しよう。



図3. 松の幹は大型地衣で覆われる。この樹幹にはマツゲゴケが多く見える。他にも、ウメノキゴケなど暖温帯の要素が多いが、日本では冷温帯要素とみなされるカラタチゴケ(中央樹幹上部左)も多い。

### 10年ぶりの天池で見たもの

次のページの図4は、10月15日、シャングリラ近くの天池(雲龍近くではない)を訪れたときの写真である。こちらの天池は標高4000m超の山上湖であるが、その10年前に訪れたとき既に周囲は針葉樹が多数伐採されたばかりだった。今回は、その倒れた幹や切り株などが多数散乱したままの状態であるが、そのような場所にたくさん見られた樹状地衣である。もこもこして、遠目にはハナゴケ属のように見えるのだが(図4上)、近づくとそうではないことが判った(図4下)。

正体はキゴケ属 *Stereocaulon*。普通、この属は岩上に生えるので、このような朽木や土上に生えている、キゴケ属ではなく、ハナゴケ属かという先入観がある。しかし例外的に、岩上ではなく、よく土上に生える種もあるのだ。確か私も、岩手県の早池峰山や北海道の大雪山



山系で見たことがあったと思うのだが、これほど多量に生えていた記憶はない。やはり雲南、と言うべきか。

十分な時間が無いので、標本をまだ同定していない。日本産では、ニセムクムクキゴケやムクムクキゴケモドキが似ている。

\* \* \*

雲南はまさに宝の山。次の調査旅行では何に出会えるのだろうか？

(完)



←図4. シャングリラ郊外の天池で見たキゴケ属。倒木や、腐植質など岩上ではなく地上に生える(上)。多数の子器が側生する(下)。

### ●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌 80号 290ページに。

### ●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 80, p. 290 of this publication.

●*Newsletter from the Japanese Society for Lichenology*, no. 93, pp. 339-342: eds. Harada H. & Kinoshita K., published by *the Japanese Society for Lichenology*, 15 December 2008.

日本地衣学会ニュースレター 93号

発行日：2008年 12月 15日

編集：原田 浩・木下 薫

発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内

©2008 日本地衣学会 (© 2008 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複製等は固くお断りいたします。